

令和元年6月28日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370347

研究課題名(和文) 想像の共同体から 土地にまつわる紐帯へ 文学批評再読による1980年代文化論

研究課題名(英文) From Imagined Communities to "Placeable Bonding": Describing the 1980s Culture through Re-reading Literary Criticism

研究代表者

大貫 隆史 (ONUKI, Takashi)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40404800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代英国文化を考えると、じつはナショナリズム論が活発に交わされた時期である、という観点は見落とすことができない。よく指摘されるように、1983年には、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』、アーネスト・ゲルナー『ネイションとナショナリズム』、そしてレイモンド・ウィリアムズ「諸ネイションの文化」が公表されている。本研究では、これらのナショナリズムの理論的な正確さを問うというよりも、これらのナショナリズム論の書き手たちのポジショニングの問題や想定される読み手の問題なども視野に入れながら、これらナショナリズム論それ自体を1980年代文化の一面として記述することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1980年代英国文化は、アイデンティティの政治という枠組で論じられることが多く、そこでは「ネイション」「コミュニティ」は、歴史性を欠いた抽象的枠組みとして見なされやすい。本研究課題は、「ネイション」「コミュニティ」をプロセスの渦中にある可変的なものと見なす。この方法的独自性によって、これらのキーワードの複層性が明らかになる。これは文学・文化研究全般を、社会科学的な用語法のもたらす制約から解放するものであり、研究の地平拡大に寄与しうる。

研究成果の概要(英文)：The 1980s in Britain is a period in which there arose an intense debate about nationalism, which is an indispensable point when we are considering the 1980s British Culture. As is often pointed out, 1983 is a year in which Benedict Anderson's *Imagined Communities*, Ernest Gellner's *Nations and Nationalism*, and Raymond Williams's essay, "The Culture of Nations" were published. This study aims at describing these papers on nationalism themselves as an important aspect of the 1980s British Culture as it is looking at the positioning and readership concerning these writers, rather than questioning the theoretical accuracy of them.

研究分野：英文学、文化研究

キーワード：ナショナリズム論 ウェールズ レイモンド・ウィリアムズ カルチュラル・スタディーズ 批評理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1980年代英国文学批評、とりわけウェールズと深く関わる Raymond Williams の議論において、ナショナリズムは、A)「中心主義的」ナショナリズム、B)「脱中心主義的」ナショナリズムの二つへと類型化される (Williams, *Who Speaks for Wales?*)

A. 中心主義的ナショナリズム	B. 脱中心主義的ナショナリズム
普遍的で人工的な関係性が基礎。一つのモデルが、国民国家の全域に適用。文化的アイデンティティ。社会性の消去。	個別具体的な「土地にまつわる紐帯(placeable bonding)」が基礎。紐帯のあり方のモデルが、複数存在し、相互に模倣ないしは批判される。社会的「かつ」文化的な紐帯。

こうしたナショナリズムの複層性が、社会科学的なナショナリズム論では見失われてしまう。本研究課題では、上記の R. Williams によるナショナリズム論をはじめとして、M. Wynn Thomas らによるウェールズ英語文学 (Welsh Writing in English) 研究、ウェールズ英語文学に強く影響を受けた Gwyn A. Williams, Dai Smith ら歴史研究者による批評的議論を再読することで、ナショナリズム論の複層性を析出してゆく。

### 2. 研究の目的

本研究課題「想像の共同体から 土地にまつわる紐帯へ 文学批評再読による 1980年代文化論」の目的は、文学批評の再読を通して、1980年代英国文化論、とりわけそのナショナリズム論見直しの端緒をつけることにある。方法論的特色は下記二点である。

【1 1980年代ナショナリズム論の死角検証】 社会科学的な議論が、ナショナリズムの想像的側面を批判するなかで陥った盲点を、80年代文学批評を再読して検証する。

【2 「土地にまつわる紐帯」と1980年代英国文化論】 ウェールズなど「ケルト周縁」におけるナショナリズムは、アイデンティティの政治に過ぎないと批判されることが多い。これを R. Williams の「土地にまつわる紐帯」という観点をを用いて再検討する。

### 3. 研究の方法

本研究課題を遂行していく上での基軸は以下の四つである。<1>Raymond Williams の1980年代批評並びに小説におけるナショナリズム論の分析、<2>1980年代ウェールズ文学批評と Williams 論の差異と連続性の析出、<3>社会科学におけるナショナリズム論の批判的分析、<4>1980年代文化論の系譜学的位置付けに要する前後の時期の分析。

### 4. 研究成果

#### 【1 1980年代ナショナリズム論の死角検証】

*The Country and the City* (『田舎と都会』) の Raymond Williams (レイモンド・ウィリアムズ) は、「知りうるコミュニティ (knowable community)」と「既知のコミュニティ (known community)」という二つのフレーズを使用することで、文化変容のプロセスにおけるコミュニティの役割を最大限重視することに成功していると言えるだろう。例えば、詩人 George Crabbe (ジョージ・クラップ) の詩をめぐるウィリアムズの議論を、これら二つのキーフレーズを用いてパラフレーズしてみるとどうなるだろうか。クラップは、十八世紀の農村の現状を詩に書く綴る中で、農村がパストラル的な楽園ではなく、そこでの労働が甚だしい苦役に他ならないことを鮮烈に記述したとされる (以下クラップをめぐる議論の詳細は *The Country and the City* 第九章に基づく)。「知りうるコミュニティ」とは、こうした農村の実相の謂いとなるわけだが、注意すべきは、「知りうるコミュニティ」が農村の実相という「対象の機能」だけでなく、「主体の機能、観察者の機能、すなわち、知りたいと願望されているものの機能、知る必要があるものの機能も」(240) また、「知りうるコミュニティ」の重要な一部である点だ。ここでいう「主体」とは、ひとつには、端的にクラップのような「書き手」のことである。つまり、詩人クラップの農村との関わり方が、ウィリアムズの指摘するように「医者」や「聖職者」的なそれである、という点もまた、「知られつつあるコミュニティの一部」(240) を構成する。というのも、同じ農村を観察するにしても、「医者」や「聖職者」というポジショニングから観察をするのか、それとも、(やはりウィリアムズが言及する) William Cobbett のようなよりモバイルなポジショニングから観察をするのかで、その農村の実相が、異なってきてしまうためである。そしてさらなるポイントは、こうした「書き手」のポジショニング問題が、ジョージ・エリオットの段階に至って、「ある特定の読者」層との「居心地の悪い契約 (uneasy contract)」(250) と化してしまうとき、それは、「知りうるコミュニティ」ではなく「既知のコミュニティ」となってしまう、というウィリアムズの主張にある。

換言すると、(a)「農村の実相という対象」も、それを記述する (b)「書き手のポジショニング」も、そのいずれもが、「コミュニティ」の一部、より正確には「知りうるコミュニティ」の一部を (相互に影響・決定しつつ) 構成する。ただし、(b) が、「ある特定の読者」層との、例えば、ミドルクラスの読者層との「居心地の悪い契約」のごとき決定力を持ってしまふとき、それは「知りうるコミュニティ」という (一種の) 未来の時制に属する可変的なコミュニティと呼ぶべきものではなくてしまう。クラップの場合であれば、彼のポジショニングが「医者」や「聖職者」的なそれであり、農村の秩序の一定の不変性を前提とすることは、クラップ

本人には変容のさせようがなかった問題である一方で、それは「居心地の悪い契約」と称すべき決定力をおそらく持たず、後の世代（例えば W・コベット）による介入を期することができるような、やはり「ノウアブル（knowable）」なものとしてあったと言って良さそうである。

その一方で、ジョージ・エリオットの段階に至ると、(b) のポジションニング問題は、ミドルクラスの読者層との「不穏な契約」のごときものとなり、可変的な「ノウアブル（knowable）」なものではなく、固定した「ノウン（known）」なものへと変化してしまうことになる。そのとき、「書き手」は、(a)「農村の実相という対象」と、それを記述する (b)「書き手のポジションニング」だけではなく、(c)「ある特定の読み手のもつ支配的イメージ」の三つに、同時に対処せねばならなくなる、ということである。

これをさらに言い換えれば、(a')「対象となる実体としてのコミュニティ」、(b')「記述する書き手」、(c')「その記述の読み手集団」の三つを、創造性を期する書き手は同時に扱う、ということになる。そして、このとき最も大きな問題となるのは、おそらく (c') より正確には、(c') と深く結びついてしまった (b') である。

つまり、創造性を期する書き手がある共同体の実相 (a') を記述しようとするとき、自らのポジションニング (b') を問わねばならないのだけれど、産業革命以降のどこかの段階で、この (b') が、当の書き手の記述を読むことになる読み手集団 (c') の「言葉遣い」「関心」「感覚」(*The Country and the City* 250) と堅く結合してしまう、ということである。そのために、書き手は、読み手集団 (c') の存在それ自体をコミュニケーションの過程のなかで意識化させない限りは、「知りうる共同体」のごく一部しか記述できない、ということになる。

上記の、ウィリアムズのキーフレーズ（「知りうる共同体 / 既知の共同体」）についての仮説的な読解をもとに、1980 年代のナショナリズム論を読解してみよう。ここで対象とするのは、Ernest Gellner（アーネスト・ゲルナー）、Benedict Anderson（ベネディクト・アンダーソン）、そしてレイモンド・ウィリアムズによる三つの論考である。このとき、ごく抽象的な言い方となるが、ゲルナーとアンダーソンには、学術的な装いの論文というフォーム上の決定的な制約があることを押さえておく必要がある。その一方で、ウィリアムズは、エッセイ的な論考ながら、その背後には、小説というフィクショナルな書き物が存在していることもあわせて指摘しておく必要がある。

つまり、ゲルナーとアンダーソンは、ネイションというコミュニティを記述するときに、(a') 「対象となる実体としてのコミュニティ」の「未知なる部分（knowable part）」しか強調することができない。(b') 「記述する書き手」及び (c') 「その記述の読み手集団」が結合している部分については、彼らの書き物においては後景に退いてしまい、「既知の部分（known part）」として、彼らの記述に制約を加える機能を果たしてしまうことになるのである。

具体的に見てみよう。ゲルナーはこう書いている。「ふたりの人間が、おたがいに同じネイションに属していると識別するのであれば、そういう場合のみ、両者は同じネイションに属している。別言すると、ネイションが人間をつくるのであり、ネイションとは、人間の信念や帰属心、連帯感という人工物のことなのである」(Gellner, *Nations and Nationalism* 7)。このネイションすなわち「人工物」という論点に、「未知（knowable）」と「既知（known）」な部分の双方が潜んでいる。ネイションが自然のものである、という従来のネイション観と比較するとき、ゲルナーの記述は、ネイションというコミュニティの「未知（knowable）」な部分を明らかにするものとなる。しかし、どのような「人工物」か、ということを読み込んで考えるとき、じつは「既知の共同体（known community）」に制約を加えられた議論であることが明らかになってくる。ゲルナーはあわせて書く。「農耕人は、自然な環境で生き残ることのできる自然種にたとえられる。産業人は人工的に生産され、飼育された種であり（an artificially produced or bred species）、この種は、自然に与えられた大気ではもはやうまく呼吸ができないのだけれど、特別に配合され人工的に維持される新しい大気や環境のなかでのみ、うまく機能し生き残ることができる」(Gellner 50)。つまり、ゲルナーの言う「人工的」なネイションとは、過酷な肉体労働の世界である「自然な環境」のもとでは生き残ることのできない、「他者とのコミュニケーションや機械の操作」のような「ものの操作ではなく意味の操作」(Gellner 32)をおこなう「産業人」をいわば保護するようなシェルターなのである。ここに見られる「既知の共同体（known community）」がいかなるものかは明らかだろう。グローバリゼーション以前の国民国家を当然視する「読み手」たちが要請する、保護の対象としてのネイションであり、さらには、猛威を振るう自然 / 脆弱な人間を保護する人工物、という二項対立が、ゲルナー的なネイションというコミュニティに埋め込まれている「既知の共同体」なのである。言い換えると、こうした点が、1980 年代ナショナリズム論の最大の死角の一つということになるだろう。

## 【2 「土地にまつわる紐帯」と 1980 年代英国文化論】

その一方で、B・アンダーソンの高名なナショナリズム論はどうなるだろうか？ アンダーソンは書く。「わたしの議論の出発点は、ナショナリティが、あるいは……ネイション性ならびにナショナリズムが、ある独特な類(たぐい)の文化的人工物だ、ということにある」(Anderson, *Imagined Communities* 13)。1980 年代は、アンダーソンの言うネイションの人工性の暴露を「ノウアブル」なものの解明として言祝いだ時代だった、とも言えそうである。しかし本報告書が問題とするのは、いかなる「人工物」か、という部分にこそ、「既知の共同体」

というアンダーソンの画期的とされた議論に大きな制約を与えている問題が潜んでいることである。アンダーソンは書く。「……少なくとも二千万冊の本が1500年までに既に印刷されていたのであって、ベンヤミンの言う「複製技術の時代」の始まりを予兆していた。手書き写本の知識が稀少で秘技的なものだとしたら、出版の知識は複製され普及されることで生き延びてきたのだ。もし……1600年までに二億冊もの本が製造されていたとしたら、出版印刷によって「世界の姿と状態」が変わってしまったとフランシス・ベーコンが思ったとしても、なんの不思議もないことになる。」(Anderson, *Imagined Communities* 41)。アンダーソンの言うネイションすなわち「想像された共同体」にとって、出版資本主義はその誕生のための必須の条件である。ただし、この条件は、ゲルナー的なプレ・グローバル主義的国民国家経済とは異なり、脆弱性をおよそ露呈することがないように見える。資本主義全般ということにはなるが、アンダーソンの別の著述を見ると、その強靱さに彼は驚きを隠そうともしていないことがよく分かる。「こうした(アナーキストとナショナリストのあいだのグローバルな)協調行動が可能になったのは、19世紀の最後の二十年間において、「初期グローバリゼーション」と呼称するものの兆しが生じていたからである。電信が発明されるやいなや、すぐに数多の改良がなされ、大洋横断海底ケーブルの敷設もそれに続いた。ほどなくして「電報」は、全地球上の都市住民にとって、当たり前なものとなった。セオドア・ルーズベルトは、電報を自分宛に発信し、それは九分間で地球を一周して彼のもとに到着したのだ。……蒸気船……により、国家から国家へ、帝国から帝国へ、そして大陸から大陸へと、前代未聞の規模で移住が生じるようになった。網目のように敷設された鉄道は、その網目をさらに細かくしながら伸張し、数百万の人びとと商品を、国内そして植民地内で移動させ、遠く離れた内陸部を相互にむすぶばかりか、港や首都ともつなげていった。」(Anderson, *Under Three Flags* 2-3)。

つまり、アンダーソンのいうネイションすなわち「コミュニティ」とは、(出版)資本主義という強靱な人工物によって、成長し(ひょっとするとアナーキックなそれにすら)変容する可能性のある人工物なのだけれど、その一方で、これらの人工物は、その外部に「自然」を持つことのない、脆弱性を一切持つことのない人工物だ、ということになる。これがアンダーソンの革新的な議論に制約を与えている「既知のコミュニティ」である。いかなる制約かと言えば、具体的には、ある種の「意図」をコミュニティから奪ってしまう、という点にそれは求められる。アンダーソンのいうネイションは、(グローバル)資本主義の進展そして技術革新によって誕生し持続し変化するコミュニティである一方で、そうした(グローバル)資本主義そのものを変容させる「意図」を持つことは、その論理構成上あり得ないことになる。

換言すれば、ネイションを人工的なコミュニティとして見ることで、アンダーソンは、コミュニティを構成する人びとを、意図を持たない「エージェント(行為体)」として位置付けた、ということになる。

1980年代文化論を考える上で、こうしたネイション/コミュニティ論を、支配的なものと想定してみると、最後に報告するレイモンド・ウィリアムズのその重要性が垣間見えてくる。ウィリアムズは書く。「「ネイション」は、言葉としては、その起源からすると(radically)「ネイティブ」という言葉と結びついている。わたしたちは、諸処の関係のなかに生まれ落ちるのだが、そうした諸関係は、典型的なかたちでは、ある場所に固定されている。この形態における紐帯は、第一義的なものであり「場所にまつわる(placeable)」ものなのだが、それは、じつに根源的な重要性をもつものであり、また、そうした重要性は、人間がつくりだしたものであり、かつ、自然に生じてきたものなのである。ただし、そうした形態の紐帯から、近代の国民国家(ネイション・ステイト)のようなものへの飛躍は、完全に人工的なものである。(Williams, "The Culture of Nations" 191)。ウィリアムズの見るところ、ネイションとは「自然に生じてきたもの」であると同時に、「人間がつくりだしたもの」でもある。ごく抽象的に言えば、この「自然かつ人工的」な集団としてのネイションとは、栽培食物と人間の歴史の関係をひもときやすく想像のつくものである。栽培食物は中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』の示唆するように、野生の植物に対して人間が人為的に働きかけた結果、生じたものである。そうやってできた栽培食物は、その収穫量の増大などにより、人間集団の有り様にも変化を及ぼさずにはおかなかったはずである。つまり、そうしたコミュニティを仮にネイションと呼ぶのであれば、それは、人工的かつ自然な紐帯、ということになる。

こうした実相をコミュニティの「未知の部分(knowable part)」と呼ぶとき、その「既知の部分(known part)」とはいかなるものであったのだろうか？ここで重要なのは、ウィリアムズが1980年代に書いていた(死後刊行)小説 *People of the Black Mountains* (『ブラック・マウンテンズの人びと』)である。ウィリアムズはこう言っている。「グリーンは、過去のプレッシャー(ブラック・マウンテンズを歩く人びとの多くはそう感じたことがあるとわたしは思います)を感じるのですが、それは、この場所に対するじつに強烈な物理的感覚であると同時に、過去をほとんど現在のものとして感じるそのことです。……小説の冒頭、グリーの脳裏をよぎるのは、[電信技術者で在野の郷土史家だった祖父エリスによる]情報と資料の集積と、これらの丘陵地帯に足を踏み入れるときに覚える感覚——ほかの人びとから自分が完全に切り離されてしまっている、そして、ここは完全に無人の場所なのだという感覚——とのあいだの、なんとも強烈なギャップです。」(Interview: *People of the Black Mountains* 166-167)。

『ブラック・マウンテンズの人びと』は二種類の章から構成されている。ひとつは、紀元前数万年からの歴史をいわば内側から、その当時を生きた人びとの視点と言葉遣いから描く章で

ある。もうひとつは、そうした歴史を、現在の視点と言葉遣いで総括していく章である。上記のグリーンとは後者の章の語り手のことを指している。

このフォーム上の工夫から見てくるのは、グリンの視点と言葉遣いから記述される現在視点/言葉遣いの章において、「既知の共同体」をウィリアムズが正面から問題にしている、ということである。歴史的視点/言葉遣いの章は、「知りうる共同体」という未知の部分に焦点化する。ただし同時に、それらの歴史的視点/言葉遣いと、ときに矛盾し衝突する可能性のある現在視点/言葉遣いの章を併置する、というフォームがウィリアムズの小説にはあるのであって、これと彼のナショナリズム論を切り離してはならないのではないか。

『ブラック・マウンテンズの人びと』において、「明るい光のもと、遠くから見ると、鯨の背のようになだらかに長くつづく尾根の数々は、青く見える」と、故郷ブラック・マウンテンズの風景についてウィリアムズは書いている。ただし、「内側から見ると、さまざまな色がある」のだとも、すぐさま彼は付言する。「ワラビ (bracken)」ひとつとっても、天候により、また季節により、その色を変えずにはおかない。「日の光のもとでは黄緑色」であるワラビは、夏の日には「より濃い緑色」となるのだと (Williams, *People of the Black Mountains* 2)。ウェールズとイングランドの境界沿いに広がる山々の織りなす眺めを、のどかで美しい景色と評してしまえば、ことはそれまでとなるのだが、実際に山々に分け入ってみれば、ワラビだけではなく、「ウィンベリー」<sub>、</sub>「スイカズラ」<sub>、</sub>「野バラ」<sub>、</sub>「ハリエニシダ」 ( *People of the Black Mountains* 2, 10) といった多様な植物が目に入ってくるのであり、ワラビと同様、天気や季節に応じて、その様相を異にする。

ことは植生の話にとどまらない。ブラック・マウンテンズは、未開の荒野などではないのだった。この地に「ワイ川沿いの洞窟群から狩人たちがやってきてから、二万五千年の年月、一千もの世代にあたる年月」がたつ。そうした歴史の残滓は、「太古の住まいであった、いまやそのかたちをほとんど留めていない横穴」 ( *People of the Black Mountains* 10, 12) をはじめ、山中にいくつも見つかるのだった。

数万年の年月は、植物相や動物相そして天候をも変化させてきたはずであり、そして、そこに住まう人びとの暮らしを、もちろん変化させずにはおかなかただろう。こうした、ごく複雑なもの、としか形容のしようのない生活のありようが、ブラック・マウンテンズに踏み入ると見えてくるわけだが、もちろん、それはあくまでおぼろげなものではないことに、注意が必要である。

ブラック・マウンテンズに棲まっていた人びとの暮らしは、「ほとんど現在のものとして感じ」られる。過去の生活の残滓を見つけることは、それほど困難なことではないためだ。しかし同時に、「ここは完全に無人の場所なのだという感覚」にも襲われることになる。過去の人びとの暮らしの実際が、山中に分け入るだけの人間には、分からないためである。

この二つの感情のあり方は、それぞれ、ブラック・マウンテンズというウィリアムズの故郷で記述される「ネイション/コミュニティ」の「知りうるコミュニティ」と、「既知のコミュニティ」を指していると言って良いのであれば、それら両者の視点と言葉遣いを視野に入れるからこそ、「人工的かつ自然な紐帯」としてのネイションという、ゲルナーやアンダーソンには記述し得なかったネイションがウィリアムズには記述し得た、ということになるだろう。そのとき、「国内的にも国際的にも自由に動ける ( nationally and internationally mobile )」力をもつ「リベラルズとソーシャリストたち」 ( Williams, “The Culture of Nations” 200) が、コミュニティ/ネイションの実相を見落とすのだと、1980年代英国でウィリアムズが批判することの意味と価値が明らかになってくるように思われる。

#### 参考文献

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso, 1983. [『増補 想像の共同体-ナショナリズムの起源と流行』白石さや、白石隆訳、NTT出版、1997年。]
- . *Under Three Flags: Anarchism and Anti-Colonial Imagination*. London: Verso, 2007. [『三つの旗のもとに——アナーキズムと反植民地主義的想像力』山本信人訳、NTT出版、2012年。]
- Gellner, Ernest. *Nations and Nationalism*. Oxford: Basil Blackwell, 1983. [『民族とナショナリズム』加藤節監訳、亀嶋庸一、室井俊通、西崎文子訳、岩波書店、2000年。]
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. London: Vintage, 2016. [『田舎と都会』山本和平、増田秀男、小川雅魚、晶文社、1985年。]
- . “The Culture of Nations.” 1983. *Who Speaks for Wales?* 191-203.
- . Interview: *People of the Black Mountains*. *Who Speaks for Wales?* 73-78.
- . *People of the Black Mountains I: The Beginning* . . . London: Chatto and Windus, 1989.
- . *Who Speaks for Wales? Nation, Culture, Identity*. Ed. Daniel G. Williams. Cardiff: University of Wales Press, 2003.

〔雑誌論文〕(計3件)

大貫隆史、共同体、視点、そして身体——レイモンド・ウィリアムズ『辺境』を読む、東北大学文学研究科年報、2019年、91-110  
<http://hdl.handle.net/10097/00125163>

大貫隆史、リアリズム<運動>、その擁護と拒絶——リアリズムの書き手としてのカズオ・イシグロとレイモンド・ウィリアムズ、商学論究、64巻、2017、165-181  
<http://hdl.handle.net/10236/00025479>

大貫隆史、英語圏ナショナリズム論のなかのウェールズ——1983年のネイション、そして<個人>、商学論究、63巻、2016、187-205  
<http://hdl.handle.net/10236/14214>

〔学会発表〕(計1件)

大貫隆史、「知りうる共同体」と「既知の共同体」——英語圏ナショナリズム論の書き手たちをめぐって、第17回「国家と法」研究会、2019年

〔図書〕(計1件)

大貫隆史、研究社、「わたしのソーシャリズムへ」——20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ、2016年、228

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。